

「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティと 対人関係上の困難との関連

山田みき・岡本祐子

Individual-based identity and relatedness-based identity, and difficulty
with interpersonal relations in adolescence

Miki Yamada and Yuko Okamoto

本研究では、近年アイデンティティを捉える視点として検討が進められている「個」と「関係性」と、対人関係上の困難の様相と、困難への対処に見られる特徴を検討した。山田・岡本（印刷中）で見出された4つの群に属する大学生を対象に、半構造化面接を実施した。得られた語りを整理し、①対人関係上の困難の内容と、②困難への対処の仕方の2つの観点から4群間の相違を検討した。その結果、①困難の内容については、アイデンティティの成熟に従い、相手からの影響ではなく、自ら行動を起す際に困難が生じること、「関係性」優位群では、他者との距離自体に困難を感じるのに対し、「個」優位群では、自分と集団が区別され、その関係において困難を感じる事が示された。②困難への対処については、アイデンティティの成熟に従い、解決に向かう方法を取ること、「関係性」優位群では、困難な出来事が生じた場合、解決は諦めるがその場の関係は維持し、「個」優位群では、困難な出来事自体を回避する傾向が示された。

キーワード: 「個」としてのアイデンティティ, 「関係性」に基づくアイデンティティ, 青年期, 対人関係上の困難

問 題

1. アイデンティティ研究における「個」と「関係性」の視点

アイデンティティとは、Erikson (1950 仁科訳 1977/1980) により提唱された概念であり、“自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚を意味する” (小此木, 2002)。Erikson (1950) により、アイデンティティの確立・達成が青年期の発達課題とされてきたことから、概念の提唱以降、主に青年期を対象に、発達心理学や臨床心理学の分野で研究が積み重ねられてきた。しかし、近年、これまでの個優位のアイデンティティ研究への反省や、女性の社会進出やライフサイクルの変容に代表される現代社会の大きな変化と、それによる成人期以降の発達への関心の高まりなどを背景に、

アイデンティティ発達をライフサイクル全体から捉えようとする研究や、女性のアイデンティティ発達を明らかにしようとする研究が盛んに行われるようになってきている。このような中で、アイデンティティにおける「関係性」への関心が高まり、「関係性」の観点からアイデンティティ発達を捉えなおすことが試みられるようになった。

この動向の初期の代表的な研究者である Josselson (1973) は、女子大学生を対象に実施した半構造化面接の結果から、“女性におけるアイデンティティの確証は、重要な他者の反応に依存している”こと、女性は、対人関係能力を自分のために価値付け、また様々な人々とうまくやっていくことで、自律の感覚を得ることを見出した。また、Gilligan (1982 岩男訳 1986) も、“女性は他人との関係を通して自分が他人に知られていくうちに、自分を知るようになる”と Josselson (1973) と類似した見解を述べている。これらの研究は、女性のアイデンティティ発達の特徴を明らかにしようとし、またアイデンティティ発達における対人関係の重要性を指摘し、その後のアイデンティティ研究に多大な影響を与えた。

その後、アイデンティティ発達における「関係性」への着目は、アイデンティティと親密性との関連(高橋, 1988)や、アイデンティティ発達と友人関係(金子, 1995)、親子関係との関連(高橋, 2003)などの形で検討が進められてきた。こうした研究の多くでは、性差の検討も同時になされ、男性のアイデンティティ発達を特徴付ける「個」の側面と、女性のアイデンティティ発達を特徴付ける「関係性」の側面として(Halpen, 1993 など)、逆に、性に関わらずアイデンティティ発達を捉える重要な2つの側面として(Hodgson & Fisher, 1979 など)、「個」と「関係性」の視点の有用性が示唆されてきた。現在では、多くの研究者が「個」と「関係性」は、男女に共通してアイデンティティ発達を捉える視点として重要であるという見解を示している(Archer, 1993 など)。

こうした立場に立ち、アイデンティティ発達に明確な形で「関係性」の視点を導入しようとした Franz & White (1985) は、Erikson (1950, 1967 岩瀬訳 1982) の記述を再検討し、“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線(two-path)モデル”を提唱した。このモデルでは、アイデンティティ発達を“個体化経路”と“アタッチメント経路”から捉え、8つの発達段階にそれぞれの課題を設定した。“個体化経路”は、第I段階の“信頼”に始まり、第V段階の“アイデンティティ”までは“自律性”等の既存の発達課題を経て、第VI段階の“職業及びライフ・スタイルの模索”、第VII段階の“ライフ・スタイルの確立”から第VIII段階の“統合性”に至る。“アタッチメント経路”では、“個体化経路”と同様に第I段階と第VIII段階は、それぞれ“信頼”、“統合性”が課題とされ、第II段階から第V段階に新しい課題が設定され、第VI、VII段階には既存の課題である、“親密性”と“世代性”が設定されている。新たに設定された課題は、第II段階“対象及び自己の恒常性”、第III段階“遊戯性”、第IV段階“共感と協力”、第V段階“相互性・相互依存”である。これらの課題から、まず他者の存在を認識することから始まり、その認識の質を高めていき、相互的な関係を結べるに至る経路が描き出されている。

Erikson (1950) が述べるように、アイデンティティを“幼児期以来形成されてきた様々な同一化や自己象が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性と連続性を持った自我の状態”と捉える時、その形成過程には、様々な同一化対象を能動的に取捨選択し、秩序付け、

統合する（小此木，2002）ことが伴う。上述のように，Franz & White（1985）が提示した“アタッチメント経路”の発達，他者という対象との関係を適切に処理する側面と考えられることから，同一化対象の取捨選択や統合，つまり自己表象と照らし合わせて他者表象を取り込む，もしくは取り込まないという心内の作業には，“アタッチメント経路”の発達が関与することが予想される。

本邦において，Franz & White（1985）と同様に，アイデンティティ発達を「個」と「関係性」から捉えることを試みた研究に，岡本（1997）がある。岡本（1997）は，成人期のアイデンティティを捉える際に，“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづくアイデンティティ”の2つの観点の導入が有用であるとし，これらは同等の価値を持ち，互いに影響を及ぼしあいアイデンティティを支えている両輪であると述べている。

Franz & White（1985）と岡本（1997）はともに，アイデンティティにおける「個」の側面と「関係性」の側面を，別の特質を持つ発達経路を経て発達する，並列関係にあるものと捉えている。つまり，Franz & White（1985）のいう“個体化経路”は岡本（1997）のいう“個としてのアイデンティティ”と，Franz & White（1985）のいう“アタッチメント経路”は岡本（1997）のいう“関係性にもとづくアイデンティティ”と類似した概念と考えられる。

山田・岡本（印刷中）では，上記のように Franz & White（1985）と岡本（1997）の指摘の共通点を取り上げ，主に Franz & White（1985）の“Erikson 理論を応用した生涯発達の複線（two-path）モデル”に基づき，“「個」としてのアイデンティティ尺度”と“「関係性」に基づくアイデンティティ尺度”を作成した。さらに，作成した尺度を用いて「個」と「関係性」の視点から青年を4群（成熟群，「個」優位群，「関係性」優位群，未熟群）に類型化し，各群の対人関係の特徴を検討した。その結果，数量的な検討においては，青年期における「個」としてのアイデンティティは，自己の能力に対する信頼感を基盤に，「個」を確立し，独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つこと，「関係性」に基づくアイデンティティは，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つことが見出された。そして，4群の対人関係の特徴を検討した結果，①群間に対人関係の在り方の相違が認められ，「個」と「関係性」の視点の有用性が示され，対人関係においては，②「個」の側面は，自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること，「関係性」の側面は，他者を自己とは独立した存在として認識し，さらに親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。

2. 青年期における対人関係

これまで述べてきたように，青年期は，それまでに積み上げてきた自分の感覚や同一化を主体的に問い直し，一個の人間として自己を確立する時期である。また，それは自己の所属する場や関係する他者からの承認を得て，安定したものとなる。しかしながら，現代社会においては，他者との関わりは浅く広く，そして複雑なものになってきている。自己を保障してくれる安定した関係が結びにくいこのような社会の中では，青年が自己を確立するということは，困難にならざるを得ないことが容易に推測される。伊藤・宮下（2004）は，個性の尊重や自分らしさの発揮などに代表され

る、日本の西欧化・個人主義化のネガティブな側面に着目し、その中にいる現代の青少年を、“関係を求めながらも、その関係で傷つき、またその傷を癒すために関係を希求していく”姿として捉えている。この指摘から、現代社会において青年が対人関係において困難を持ちやすく、さらにそれへの対処の過程においても、対人関係上の困難や傷つきを経験する青年の姿が想像される。

青年の対人関係を扱った研究は、これまでに多くなされている。対人関係のうち、友人関係を取り上げた研究は、落合・竹中（2004）によると、“構造研究”、“関連研究”、“発達研究”の3つに大別され、様々な角度から検討が行われている。友人関係そのものを検討した研究は、上記のうち“構造研究”に属するが、その中には、特定の要因に注目して青年の持つ対人関係の類型化を試みたトップダウン型の研究と、実際の友人関係を収集・分類して類型化をみたボトムアップ研究とが含まれる。後者の代表的な研究である岡田（1993）や落合・佐藤（1996）、長沼・落合（1998）では、青年期の友人関係を、“友人関係様式”（岡田，1993）や“つきあい方”（落合・佐藤，1996；長沼・落合，1998）という観点から検討し、青年の友人との関係の持ち方を包括的に捉えている。落合・佐藤（1996）と長沼・落合（1998）では、“友人との付き合いの深さ”の次元が重要な心理的要因として指摘され、岡田（1993）を再検討した岡田（1995）では、現代青年の友人関係の特質として、“表面的な楽しさを求める傾向”、“傷つくことを恐れる傾向”、“深い関わりを回避する傾向”が見出された。このように、青年の持つ友人関係の特質や特徴が徐々に明らかにされてきた一方で、上述のような友人関係の中で、青年がどのような体験をしているのか、また見出された関係を持つに至る、対人関係の中での青年の心理については、ほとんど検討がなされていない。

友人関係の他に、これまで青年の対人関係の1つとして取り上げられることの多かった対人関係に、親子関係がある。親子関係に関しては、第二の分離-個体化（Blos, 1962 野沢訳 1971）を代表とする理論に沿って、実際の関係が検討されている。例えば岡本・上地（1999）は、青年期の親イメージとして、“理想化”、“理解”、“脱依存”、“対立”を見出し、“理想化”から“脱依存”に向かうイメージの変遷を検討している。また、平石（1999）は、親子間のコミュニケーションに見られる個性化を類型論的視点から捉えなおすことを試みている。そして、それまでの研究では、青年期後期には、中期に一度離れた親子関係が再び結びつきを取り戻し、仲間のような相互的な関係に至るとされていたが、青年-両親関係の多様性と家族システムによる差異があり、一概には言えないことを明らかにした。以上のように、青年の親へのイメージや親子関係の在り方が多く検討されているが、友人関係を取り上げた研究と同様、親子関係を捉える枠組みと共に、その関係の中での青年の体験の観点からも、実像に迫ることが求められる。

以上のように、青年期の対人関係について様々な問題が指摘され、関係のあり方が明らかにされてきているが、これまで関係の中での青年の感情や主観的な体験が取り上げられることは少なかったと考えられる。よって、本研究では、青年が日常の中で感じている対人関係における「困難さ」に焦点を当て、面接調査の手法を用いて、青年の語りから質的に検討することを試みる。その際に、対人関係を捉える視点としての有効性が示唆されている上述の山田・岡本（印刷中）の「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティの観点から検討を行うことにより、青年のアイデンティティ発達と対人関係との関連を検討する。

方 法

1. 調査対象者

山田・岡本（印刷中）の質問紙調査の対象者中、引き続き研究への協力に応じた大学生 20 名（男性 9 名，女性 11 名；平均年齢 20.00 歳， $SD=1.03$ ）。なお，この 20 名は，“「個」としてのアイデンティティ尺度”と“「関係性」に基づくアイデンティティ尺度”の得点を用いて行ったクラスタ分析の結果得られた 4 クラスタ各 5 名であり，男女比を考慮した上で，ランダムに選出した。本研究の対象者の概要を Table 1 に，山田・岡本（印刷中）のクラスタ分析の結果を Figure 1 に示す。調査は，2005 年 7 月下旬～9 月上旬に実施した。

Table 1
対象者の概要

対象者	クラスタ 1					クラスタ 2					クラスタ 3					クラスタ 4			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
性別	女	男	女	男	女	男	女	男	女	女	男	女	女	女	男	男	男	女	女
年齢	21	21	19	20	20	18	20	21	21	21	19	20	19	19	21	19	20	22	20
学年	3	2	2	3	3	1	3	3	4	3	1	3	2	2	4	2	2	2	3

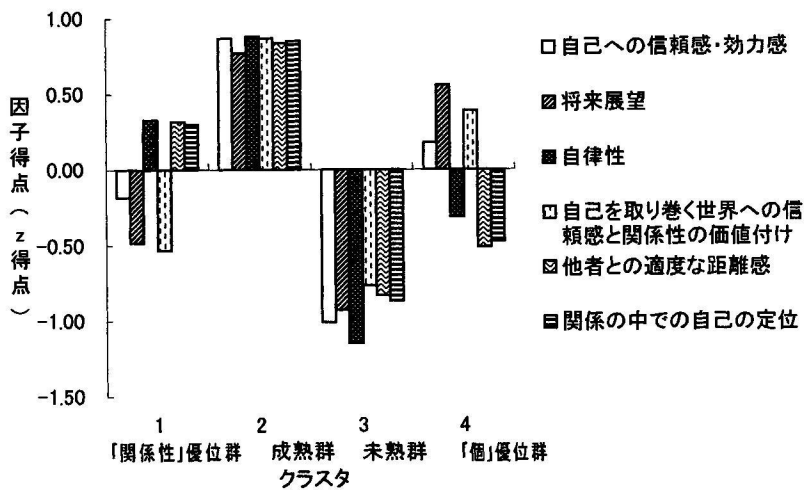


Figure 1 クラスタ分析の結果(山田・岡本, 印刷中)

注) “自己への信頼感・効力感”，“将来展望”，“自律性”は，“「個」としてのアイデンティティ尺度”の下位因子。“自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け”，“他者との適度な距離感”，“関係の中での自己の定位”は，“「関係性」に基づくアイデンティティ尺度”の下位因子。

2. 手続き

1回90~120分の個別の半構造化面接を実施した。調査開始前に承諾書に署名を求め、録音や結果の公開への同意を得た上で、内容は全て録音し、後日逐語記録を作成した。調査場所は、A大学は大学附属の心理臨床センターの面接室、B大学は学生相談室であり、いずれも第3者の出入りのない場所であった。

3. 質問項目

対象者の対人関係の在り方や、それに対する評価・考え方などを幅広く聴取するために、以下の5項目について尋ねた。①周囲の関わりのある他者との関係とそれへの評価、②現在最も関わりの深い他者との関係、③これまでの対人関係上の困難の内容とそれへの対処、④過去の関わりの深かった他者との関係とそれへの評価、⑤一人でいる時の過ごし方。

本研究では、上記のうち、③の質問項目に対する対象者の語りのみを用いて検討を行った。

4. 結果の整理

対人関係上の困難に関しては、各対象者の③に対する発言を文章単位(1~3文)で抜き出し、困難な出来事について1人ずつ語りを要約した。要約から、対象者ごとに困難の内容を表すラベルをつけた。抜き出した発言数は、1人の対象者あたり1~5個であり、計47個であった。また、その困難の生じた時期と困難を感じた相手についても整理した。なお、1人の対象者が複数の困難を挙げた場合もあり、表中の要約、時期、相手の数の合計が5を超えるクラスも存在した。

次に、困難への対処に関しては、該当する発言を文章単位(1~3文)で抜き出し、KJ法(川喜田, 1967)により類似した発言をカテゴリー化した。抜き出した発言数は計79個で、カテゴリーは8個であった。具体的な手順は、以下の通りである。抜き出した発言を1枚のカードに1つずつ記入し、それらを机上にランダムに並べ、記入してある発言を何度も読み、意味の近いと考えられるカードを収集してグループ化した。次に、収集したカード全体を見渡し、それらに共通するテーマ(心理的な意味)を1つのグループに1つつけた。この時点でのカテゴリー数は18個であった。18個のカテゴリーを記述したカードに対し、同様の作業を再度実施し、最終的に8個のカテゴリーを構成した。

後日、最終的に抽出されたカテゴリーの妥当性を検討するため、筆者が作成した評定マニュアルにより、それぞれのカテゴリーの特徴を提示し、全ての発言について、臨床心理学を専攻する大学院生2名が独立して再分類した。評定者間の一致率は、74.68%であり、十分な妥当性が示された。なお、評定が一致しない項目は、評定者間で協議の上分類を行った。

結果

1. 対人関係上の困難の内容と、それが生じた時期、相手

対人関係上の困難の内容に関する語りの要約と、困難が生じた時期、困難を感じた相手を整理したものをTable 2に示す。

Table 2

クラスタごとの、対人関係上の困難の内容と、困難を生じた時期、困難を感じた相手

クラスタ	困難の内容	困難の生じた時期	困難を感じた相手
「関係性」 優位群	<ul style="list-style-type: none"> ・親と自分との距離の近さ ・友人との意見の相違 ・友人と適切な距離をとること ・他者からの干渉 ・友人関係の不安定さ 	大学(3) 高校(2) 中学(2)	友人(4) 親(1)
成熟群	<ul style="list-style-type: none"> ・友人と打ち解けること ・傷つきやすい友人との接し方 ・恋人との別れ ・他者と関係を作っていく過程 ・友人との意見の相違 	大学(3) 高校(3) 中学(3)	友人(4) 一般他者(1)
未熟群	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の理不尽な対応 ・他者との距離の近い付き合い ・いじめ ・親からの連絡 ・友人との意見の相違 	大学(3) 高校(3) 中学(3) 小学校以前(1)	友人(4) 親(1) 一般他者(1)
「個」 優位群	<ul style="list-style-type: none"> ・裏切られ体験 ・友人との距離の近い付き合い ・いじめ ・友達を覚えきれない ・集団への馴染めなさ 	大学(4) 高校(2) 中学(2)	友人(5) 先生(1)

注) 困難の生じた時期と困難を感じた相手の欄の()は、該当した対象者数を示す。

困難の生じた時期は、4群ともほぼ同時期であった。困難を感じた相手は、ほとんどの対象者が「友人」を挙げ、その他には、「親」、「一般他者」、「先生」が挙げられた。

困難の内容については、「関係性」優位群では、相手との「距離」や相手からの「干渉」などの対人関係そのものについてが主であった(5人中4人)。成熟群では、相手との具体的な関わり方についてが多く(5人中3人)、相手への積極的な働きかけの中で生じる困難に言及された。未熟群では、理不尽な対応や親からの連絡などの、相手からの具体的、かつネガティブな働きかけが多く(5人中3人)、そのうち1名については、幼少期から困難さを感じており、それが現在まで続いているとの発言があった。「個」優位群では、他者からの具体的、かつネガティブな関り(5人中2人)と、「友達を覚えきれない」、「集団への馴染めなさ」という集団対個人の関係で生じる困難が挙げられた(5人中2人)。以上より、困難を感じた時期と相手は、群間で相違は見られなかったが、困難の内容は、群ごとに異なっていることが示された。

2. 対人関係上の困難への対処の仕方

KJ法により語りを整理した結果、対人関係上の困難への対処の仕方として、8つのカテゴリーが抽出された(Table 3)。

①「他者の援助」は、「悩んでいる時に、友達が直接的に指摘をしてくれて」や「悩んでいたら(省略)話を聞いてくれて」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、対人関係上の困難への気づきや、困難への対処の過程に他者の影響があったことを示す。このカテゴリーは、「関係性」優位群の1名にのみ見られた。

Table 3
クラスタごとの対人関係上の困難への対処の仕方

クラスタ	①他者の援助	②悩む	③回避	④努力	⑤諦め	⑥消極的対処	⑦反発	⑧納得
「関係性」 優位群	1 (A)	2 (A,C)	2 (B,D)	2 (A,C)	4 (B,C,D,E)	1 (D)	0	1 (C)
成熟群	0	2 (F,G)	0	3 (F,G,I)	0	1 (J)	0	3 (F,H,I)
未熟群	0	1 (K)	4 (L,M,N,O)	0	3 (K,M,N)	2 (L,O)	2 (K,O)	2 (M,O)
「個」 優位群	0	0	4 (P,Q,R,T)	1 (S)	2 (P,R)	2 (Q,R)	0	0

注) () は、該当した対象者を示す。

②「悩む」は、「とりあえず考える」「うろうろして考える」など、「考える」「悩む」という直接的な言葉が見られた発言を含む。また、行動的にも引きこもって悩んだり、最初に困難を生じた相手ではない他者との間で、無意識的に同様の関係を繰り返し、それを反省するなども含まれる。このカテゴリーは、困難を感じてから比較的早い段階で出現し、困難を感じた出来事に圧倒され考え込むこと、悩むことを示す。このカテゴリーは、「個」優位群以外の群で見られた。

③「回避」は、「(困難を感じる場面から)できるだけ逃げようとする」や「(嫌な話題をふられたら)聞き流す」、「(苦手な他者と)あまり関わらない」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、出来事を自分から切り離すことで、困難を感じる事態に直面しないようにする、または直面しても回避することを示す。このカテゴリーは、成熟群のみ見られず、未熟群と「個」優位群では、それぞれ5人中4人の対象者に認められた。

④「努力」は、「意識的に(相手と自分を)分けて捉えようとする心構えを作った」や「(先入観を取り払うために)自分のことをしゃべる。積極的に話をする」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、少々無理をして、または意識的に対応を変えてみる、困難を感じた相手との間で、相手の反応を見ながら対応するなどの、困難の解決を目指した積極的な対処を示す。このカテゴリーは、未熟群以外の群に見られ、成熟群では5人中3人の対象者に見られた。

⑤「諦め」は、「そういうものだ」と割り切る」や「辛いけどしょうがない」などの発言を含む。また、「とりあえず我慢」や「何かあったら自分が我慢する」など、当初から解決を諦め、我慢するという対処を取ることも含まれる。このカテゴリーは、解決への期待は捨てるが、割り切ったり我慢したりすることで、その状況や対人関係の輪には居続けることを示す。このカテゴリーは、成熟群のみ見られず、「関係性」優位群では5人中4人、未熟群では5人中3人に見られた。

⑥「消極的対処」は、「(クラスメイトとの関係での困難が生じた時)なんかあったら先生に文句言ったり」や「自分が悪くなくてもとりあえず謝る」、「口では適当に言う。当たり障りのないようなことを」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、解決を他者に任せたり、その場を丸く収め

るために、相手に合わせた対処をとったりするなど、間接的・消極的な対処を示す。このカテゴリーは、全ての群に見られ、未熟群と「個」優位群では2名ずつ見られた。

⑦「反発」は、「イライラする」や「殴りかかる」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、困難に対して感情的に反応したり、情緒的な反応を行動に表すことを示す。このカテゴリーは、未熟群のみに見られた。

⑧「納得」は、「(相手の反応の)理由が分かるから」や「時間をおく」、「(親は)心配なんだろうと思うように」などの発言が含まれる。このカテゴリーは、出来事が生じてから比較的時間が経ってから出現し、困難を感じた出来事を捉え直し受け入れることや、対処としては理解した上で時間が経つのを待つことを示す。このカテゴリーは、「個」優位群以外に見られた。

考 察

1. 対人関係上の困難の内容と、それが生じた時期、相手

対人関係上の困難が生じた時期については、中学から大学まで、全ての群で同様の結果であった。また、全ての群で、困難は過去から現在まで続くものとして語られることが多く、青年期においては、対人関係上の困難は、一時的なものではなく、自分の特徴から生じる長期的なものとして認識されていることが推測された。

対人関係上の困難を感じた相手も、全ての群で同様であり、「友人」が多く挙げられた。従来から指摘されているように、青年期においては、それ以前は両親に向けられていた依存愛情欲求が、親以外の対象である友人や恋人などに向けられ (Blos, 1962; 岡本・上地, 1999)、現実的に関わる他者の範囲が増加すると考えられる。したがって、青年期には、友人との関係にエネルギーを注ぎ、様々な取り組みをしているため、本研究では、対人関係上の困難として、友人関係に関する出来事が多く挙げられたと考えられる。

対人関係上の困難については、各群での相違が見られた。「関係性」優位群では、距離感などの他者との関係そのものが、成熟群では、他者に対する積極的な働きかけの中で生じる困難が挙げられた。未熟群では、他者からのネガティブな働きかけが多く挙げられ、総合すると被侵襲感を伴う体験が挙げられた。「個」優位群では、他者からの具体的でネガティブな働きかけと、集団対個人の間で生じる問題が、それぞれ半数以上の対象者に見られた。

山田・岡本 (印刷中) の結果と照らし合わせると、以下のように考えられる。山田・岡本 (印刷中) では、「関係性」優位群は、“「関係性」に基づくアイデンティティ尺度”の下位因子得点がより高く、他者との親密な関係を築くことが可能である一方で、自他の融合感が伴うことが指摘されている。本研究で、「関係性」優位群の対人関係における困難として、他者との関係そのものが挙げられたことは、この群に属する対象者が、関係のあり方への関心が高いことを示唆する。つまり、自他の融合状態にありながら親密な関係を求めている中で、他者との距離感や、干渉などの被侵入感に対処しようとしていると考えられる。また、「関係性」優位群と逆の得点配置を示す「個」優位群については、山田・岡本 (印刷中) では、自他の融合感は少なく、幅広い他者との関係を築くことが指摘されている。本研究で、「個」優位群の困難を感じる場面として、集団対個人の間で生じる問

題が挙げられたことは、幅広い他者との関係を築く傾向にある「個」優位群の青年が直面しやすい問題として捉えられる。しかし、他者からの具体的でネガティブな働きかけも同程度挙げられたことから、「個」優位群の自他の融合感のなさが、他者の存在を認識した上での成熟したものではなく、他者個人や他者集団に対し、一方的に提示された「個」であることも推測される。

成熟群は、山田・岡本（印刷中）では、両尺度の全ての下位因子得点が平均よりも高い群であった。本研究の結果、成熟群は、他者に対して働きかけの中で困難を感じることを示された。「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティのバランスがとれ、全体としてアイデンティティの形成が進んでいる特質を持つ成熟群においては、他者からの影響ではなく、自分が他者に対して行動を起こす際に、困難が生じると考えられる。多川（2001）は、青年にとって、“自分の意見を主張すべき”という対人関係観が重要であること、それが対人関係の親密化に伴うことを指摘している。本研究においても、アイデンティティの成熟に従い、対人関係の中で積極性を発揮し、その際に困難を感じることを示唆された。山田・岡本（印刷中）では、未熟群は、成熟群と逆に、全ての下位因子得点が平均より低い群であった。本研究では、他者からの具体的でネガティブな、被侵襲感を伴う働きかけが、未熟群の感じる困難として挙げられた。自他の融合感が強く、他者との相互独立的な関係を築くことも難しいこの群の青年にとって、他者との関りは被侵入感を伴うことが多いと推測される。また、困難を感じた出来事に関する語りも、「他者の理不尽な対応」や「親からの連絡」など具体的なものが多く、困難を感じた相手の行動の背景や、それに伴って生じた感情・思考のレベルでの困難ではない。つまり、未熟群の青年は、出来事そのものに圧倒され、困難さを感じていると考えられる。

2. 対人関係上の困難への対処の仕方

KJ法により語りを整理したところ、Table 3 に示した 8 つのカテゴリーが得られた。

①「他者の援助」は、「関係性」優位群のみに見られ、他者との関係に関心が高く、他者からの影響も受けやすいことが推測されるこの群の特徴として考えられる。しかし、「関係性」優位群の中でも 1 名にしか見られなかったことから、群全体の特徴とするのには、問題が残る。

②「悩む」は、「個」優位群では見られなかった。このカテゴリーが、困難が生じてから比較的早い段階で出現することを考え合わせると、「個」優位群の青年は、困難に直面しても悩んだり考えたりは少なく、何かしらの行動にうつることが推測された。もしくは、後述する③「回避」に「個」優位群のほぼ全員の対象者が該当していたことから、困難な出来事に出会うと、それに巻き込まれる前に、自らその場から撤退することが可能性として考えられる。

③「回避」は、成熟群には見られず、対処法としては適応的ではないことが示唆された。未熟群と「個」優位群では 5 人中 4 人の対象者が該当しており、これらの群の青年の、困難を回避することで、「個」を守ろうとする姿が推察される。

④「努力」は、成熟群で最も多く見られた。困難な出来事に対し、積極的に取り組もうとし、最終的には困難の解決を目指しており、適応的な対処法と考えられる。語りの中には「意識的に（対象者 A）」や相手の反応を見ながら（対象者 F, G）などの発言があり、「努力」の対処法を用いるに

は、困難を前に自己コントロールができること、他者を配慮して行動できることなどの、成熟したあり方が求められると推察される。

⑤「諦め」は、成熟群以外に見られ、「関係性」優位群では、5人中4人の対象者が該当した。このカテゴリーの特徴として、困難の解決は諦めるものの、その場の対人関係は保つことが挙げられ、他者との関係に敏感な「関係性」優位群のあり方の一端がうかがわれた。このあり方は、未熟群においても5人中3人に見られており、③「回避」と同様、困難の解決に向かう対処がとりにくいことが考えられる。

⑥「消極的対処」は、全ての群に見られ、青年期に普遍的に見られる対処法であることが示唆された。対処の具体的な方法については、群間で相違があることも予想されるため、引き続き、対象者数を増やして検討することが求められる。

⑦「反発」は、未熟群のみに見られ、不適応的な対処法である可能性が示された。困難に対して感情的、行動的に反応し、これらの反応は衝動性も高いことが推測され、未熟なあり方が反映されている。しかし、該当したのは5人中2人であり、未熟群全体の特徴ではない可能性もある。

⑧「納得」は、「個」優位群以外に見られた。このカテゴリーは、困難な出来事を捉え直し受け入れられるとされているが、その内容は、群間で異なると考えられる。特に、「時間をおく」という対処の仕方については、成熟群では、「相手のことが分かってくるので」と時間をおくことで状況が好転するという見通しが立った上で行っている（対象者F、I）のに対し、未熟群では、そういった発言は見られず、困難の解決へ向かう対処法としては機能していない可能性が高いと考えられる。しかし、今回の語りからは、質的な差異は明確にはならないため、対象者数を増やす、調査項目を詳細にするなどの改善をし、検討を重ねる必要がある。

各群の特徴としてまとめると、「関係性」優位群では⑤「諦め」が、成熟群では④「努力」と⑧「納得」が、未熟群では③「回避」、⑤「諦め」が、「個」優位群では③「回避」の対処方法が多く取られることが示された。

山田・岡本（印刷中）の結果と照らし合わせると、次のことが考えられる。他者との関係に敏感な「関係性」優位群の青年は、困難への対処では、その場の関係維持に比重を置く⑤「諦め」を多く用い、困難の解決よりもその場の対人関係を重視する傾向が示された。「関係性」優位群と逆の特徴を持つ「個」優位群の青年は、③「回避」の手段を多く取り、関係の中で生じる難しさを扱うことを避け、関わりから撤退し、「個」を守ることが明らかになった。

「個」としてのアイデンティティも「関係性」に基づくアイデンティティも高い成熟群の青年は、困難に対し積極的に働きかけ（④「努力」）、また時間経過に伴って、困難な出来事を捉え直し、待つことができる（⑧「納得」）ことが示唆された。未熟群の青年は、解決に向かう対処方法を取るとは難しく、困難自体を③「回避」したり、直面しても⑤「諦め」てその場に居続けたりすることが多いと考えられる。他者に対する被侵襲感が強いという背景を考え合わせると、困難な出来事に直面した際、「個」を守ること、その場の「関係性」を維持することも難しい状態になることが予想される。

以上より、アイデンティティの成熟に従い、対人関係上の困難が生じた時、解決に向かう方法を

取ること、「関係性」優位群では、困難な出来事が生じた場合、解決は諦めるがその場の関係は維持し、「個」優位群では、困難な出来事自体を回避する傾向が示された。

引用文献

- Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In Kroger, J.(Ed.), *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 75-99.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
(ブロス, P. 野沢栄司(訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977/1980). 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理(訳) (1982). アイデンティティ —青年と危機— 金沢文庫)
- Franz, C. E. & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge MA: Harvard University Press.
(ギリガン, C. 岩男寿美子(監訳) (1986). もう一つの声 —男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ— 川島書店)
- Halpen, T. L. (1993). A constructive-developmental approach to women's identity formation in early adulthood: A comparison of two developmental theories. *Dissertation Abstracts International*, 55(3-B), 1201.
- 平石賢二 (1999). 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する研究 三重大学教育学部研究紀要 教育科学, 50, 191-204.
- Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college Youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 伊藤美奈子・宮下一博(編著) (2004). 荒れる青少年の心 傷つけ傷つく青少年の心 北大路書房
- Josselson, C. E. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 金子俊子 (1995). 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 —創造法開発のために— 中央公論出版社
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 落合良行・竹中一平 (2004). 青年期の友人関係研究の展望 —1985 年以降の研究を対象として—

- 筑波大学心理学研究, **28**, 55-67.
- 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43-55.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, **47**, 248-258.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析 —フロイトからフロイト以後へ— 講談社学術文庫
- 多川則子 (2001). 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 —青年期の恋愛関係と友人関係— 名古屋大学大学院教育発達学研究科紀要 心理発達科学, **48**, 374-375.
- 高橋裕行 (1988). 同一性と親密性の危機の解決における性差 —自我同一性地位の Rusbussen の EIS による併存的妥当性の検討— 教育心理学研究, **36**, 210-219.
- 高橋由利子 (2003). 青年期前期のアイデンティティの発達と親子関係 —同一視理論の視点から— 目白大学人間社会学部紀要, **3**, 63-76.
- 山田みき・岡本祐子 (印刷中). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ —対人関係の特徴の分析— 発達心理学研究, **19**.